

秋、冬のクチキコオロギ

山 崎 俊 道

本種は成虫、幼虫共に一年中見られ、エンマコオロギと並ぶ大型種にもかかわらず、分布が局地的であること、枯木や生木の樹皮下、樹洞を住家とするなど、比較的人目にふれる事が少なく、又その特異な習性などが相まって未だ不明な点が少なくない。

筆者は今回淡路島に於けるクチキコオロギの観察を、三熊山、淳仁天皇御陵、先山にもとめ、1973年10月9日より1974年3月末日までのわずか5ヶ月間であるが、飼育とを併せ行なったので、これをここに報告する。

尚、野外観察、飼育は引きつづき行なっている。

I 発音行動

10月9日以後の観察であるが、この頃は昼、夜ともに盛んに鳴くのが観察され、鳴声は二種類に大別できる。

一つは、雄が単独でいる場合、あるいは雌が近くにいっても無関心な場合で、比較的澄んだ声で高く、ギー、ギーと一定のリズムで続けて鳴く。

他の一つは、明らかに雌への求愛を示すものであり、交尾に移る前によく聞かれ、しわがれた低い声で、リズムの一定しない鳴き方となる。

前者の場合、テリトリーの主張、雌を呼ぶなどの意味が考えられるが、ここでは便宜上単にテリトリーソングと称し、後者をラブソングと称しておく。

両者の区別は野外に於ても、比較的容易にできるが、気温が下がり一様に低くしわがれた声になると区別が困難になる。

一般に昼間は樹皮下、石垣の隙間（一例のみ観察）、樹洞などの潜伏場所で鳴き、外の気配にも敏感であるが、希に潜伏場所より出て鳴いている個体を見る事がある。

この場合は近くに雌が潜伏しているときで、注意は専ら雌に向けられており、明らかにラブソングで容易に鳴き止まぬ。

夜間は潜伏場所を離れて鳴く事も多い。それがラブソングの場合特に顕著で、これは雌が潜伏場所を離れて動き出す事から、雄も必然的にその動きにつられるものと思われる。

終鳴は、12月15日三熊山で観察したもので、その時の外気温が10.5℃であった。尚、この間にあっても、寒い日などは全く鳴声の聞かれぬ事もあり、11月に入ってからは、昼間のごく暖かい時間帯だけに限られていたようである。

発音行動は温度の影響を非常に受けるものであるが、今回の観察では、何℃以上で鳴き始める、といった明確な基準は見出せなかった。が、原則として、10℃以下では鳴かぬように思われる。

室内飼育の個体では、室を暖めた場合、12℃位で鳴き出すのが観察されたが、他の要因も影響するの一般的なではない。

室内飼育のものでは、12月31日まで鳴声が聞かれた。この間、12月中の室温は最低で3℃、最高で11℃を越える事はなかった。

II 交 尾

野外での交尾は観察できなかったが、飼育のものに於ては、たびたび観察された。

最初に観察したのが10月12日、終りが10月28日であった。

交尾の状態は、先づ雄が前翅を立て、体を前後にゆすり、ギー、ギーとしわがれた声で低く鳴きながら雌に向かって後ずさりして行く。雌の下へ尻をやりながら雌が雄の上に乗り易いようにする。あるいは、雄が強引に雌の下へめぐりこんでしまう。雌はエビ型に体を少し曲げ、雄の立てたままの前翅の内側に前脚を乗せた状態で生殖器の結合が行なわれる。当然ながら、交尾中雄は鳴かない。

一回の交尾時間は一定せず、20秒位から20分に到ることもあり、交尾回数も数回から10数回を越える事もあり一様でない。

同一個体が、数日を経て再び交尾する事もしばしば観察した。

III 食 性

一般に昼間は潜伏場所を離れることがなく、夜間歩きまわって摂食することが知られているが、気温の低下につれて、その動きも鈍くなる。

10月も後半に入ると肌寒い日が続き、夜間の観察に於ても、あまり動きまわる様子は見られず摂食量も減少するようである。

一本の松の皮下に7匹(雄2、雌5)いるグループの終日観察を行なった例でもそれがいえるようであった。

日没後、各個体が潜伏場所より出て動き始める時間は一様でなく、各自気が向いた時に行なうようである。

10月24日行なった観察の一例を挙げてみると、1個体が松の潜伏場所を離れたのが、午後8時30分、松の根元部分に生えていたキノコの種類を、次に1m程離れた場所で、ツクサのやや乾燥気味の花の部分それぞれ10分間程度食した。しかし、いずれも食痕はごくわずかであった。

この頃になると動作も緩慢で、地上に降りてからもしばしば活動を停止する事がある。風の当る

ような、決して越えるような場所でないにもかかわらず、1時間、ときには2時間も静止状態をとる事があり、これらは他の個体にも共通して見られた。

摂食を終え、再び元の松に戻ったのが午前0時、しかし同じ松でも潜伏場所は前と異なっていた。又、他の個体では再び戻ることなく、3 m程離れた別の樹へ上ってしまった。

たどり着いた時点で適当な潜伏場所があれば、それを利用するものと思われる。

野外観察では、特に本種の好む食物は見出せなかった。

飼育に於ては、キュウリ、ナスビ、青菜、松露、松の樹皮、蜜蜂の仔、マイナーフード(九官鳥の餌)を与えたが、いずれも食した。

一度などは、バリバリと音がするので近づいてみると松の樹皮をかじっていることもあった。一般に青菜類を好み、摂食量も大である。

11月29日、野外で採集した雄1頭に青菜を与えた時の例では、大変な食欲ぶりを示し、音をたてながらわずか5分位で、2.3 cal(方眼紙で計算)を食した。(午後11時、気温10℃)野外では相当飢えた状態にあったものと思われる。

室内飼育のものでは、冬期でも小量ながら青菜を食し、ときどき蜂の仔(冷凍保存したもの)をも与えると食するのがみられた。

しかし、いくら飢えた場合でも、冬期間共食いはみられなかったし、他の個体の死んだのを与えても、それを食するようなことはなかった。

■ 越 冬

野外での越冬状態を観察するにあたり、時期により必要に応じて棲息場所に赴き、できるだけ多くの潜伏場所を調査した。

その結果、12月末までは潜伏場所にも差異はみられず、雌雄の割合もほぼ同じであった。1月を過ぎる頃より変化がみられはじめ、これまで外から容易に観察できる場所にいた個体が、徐々に姿をけし始める。

これはより完全な越冬体制に入るための、潜伏場所の移動がなされたものと思われる。

この頃になると落伍者も目につきはじめ、樹皮下、樹洞内で死体を見出すことになる。

これは雄にも雌にも見られることで、越冬という苛酷な条件のもとで、一種の淘汰が行なわれるものと思う。

飼育のものでは、2月に入って雄は死に絶え、雌も半数近く死んでしまった。幼虫は非常に強く、悪い条件下でも死ぬことはなかった。

これから考えられることは、越冬は本種にとって大きな試験であり、弱い個体は淘汰される。交

尾を終えた雄は、原則として越冬中に死に絶えるものと思われる。幼虫は、成中以上に強く、うまく適応できるものと思われ、死亡率も少いように思われた。

淡路島産の蝶類追加 (I)

堀 田 久

筆者は、淡路島産の蝶類について本誌№9に発表したのが、その後採集されていることが判明した種について報告しておきたい。なおこれで淡路島から記録された蝶類は、トラフシジミ(本誌№10)を加えて72種類を数えることになる。

1. コツバメ *Ahlbergia ferrea* Butler

山崎俊道氏が1965年と1966年の4月、津名郡五色町広石と下辨で本種をかなり採集し、多数の個体を目撃されている。

2. ヤクシマルシジミ *Celastrina puspa umenonis* Matsumura

1972年10月、三原郡南淡町灘で本種が1頭採集されている。(写真から♀と思われる)これは、愛媛大学農学部昆虫学研究室が国立公園協会から依頼されて、本四架橋ルートの島々の昆虫相の調査を実施したとき記録されたものである。(本州四国連絡架橋に伴う周辺地域の自然環境保全のための調査報告書、学術編昭和48年3月財団法人国立公園協会)なお、未筆ながら貴重な資料を御恵いただいた愛媛大学農学部の久松定成先生に厚くお礼申し上げます。

洲本市でミヤマクロハナカミキリを採集

1973年5月12日、洲本市安乎町で、ガマズミの花に来ていたミヤマクロハナカミキリ *Anoplodera excavata* Batesを3exx採集したが、1974年5月18日にも全く同じ場所で本種を8exx採集したので報告しておく。

(堀 田 久)